

月報アルバム

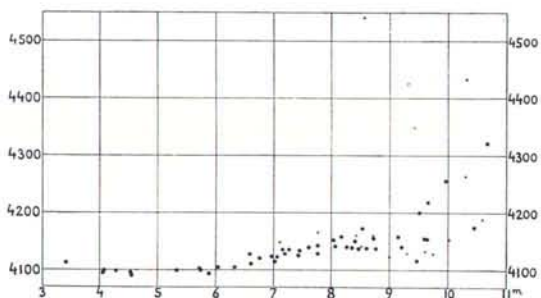
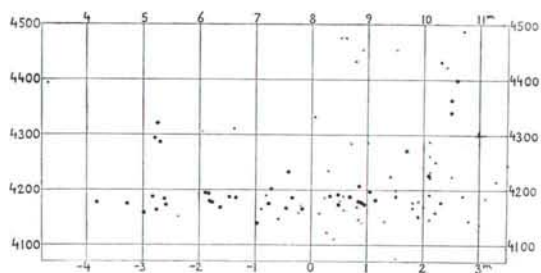
ヘルツスプルング (Ejnar Hertzsprung) の面影と最初の等級-色図



(左上) ヘルツスプルング (左) とエディントン、1926年8月コペンハーゲンでの天文学会の時。(A. V. Nielsen の論文より)

(右上) 1961年夏、アメリカのパークレイで開かれた第11回IAU総会にて(斉藤国治氏撮影)

(右) 1911年にヘルツスプルングが最初に発表したヒヤデス(上図)とブレヤデス(下図)の等級-色図。縦軸は波長(A), 上図の横軸は上が実視等級, 下は絶対等級, 下図の横軸は実視等級である。図中の黒丸はそれぞれの星団に属する星で, 白丸は見かけ上星団の付近に見えている星である。現在のHR図はこの図を90°回したものである。(A. V. Nielsen の論文より)



鹿児島から見

鹿児島市在住の山口志摩雄氏は、鹿児島で観望可能な星野域を探す目的で、南天の星座をその南中時に 35 mm カメラで撮影し、このほど「南天の星座(鹿児島)」という写真 18 枚のアルバムを完成された。

ここに紹介した写真は、その中の 4 枚で、①は画架、竜骨座 ②は南十字の γ 星で中央左下寄りに見える明るい星がそれである ③は定規座 ④はアケルナー (α Eri) で下の右寄りの山の端に写っている。

撮影は、鹿児島市谷山のラ・サール理科館屋上天文台(北緯 $31^{\circ}31'35''$) の 20 cm 赤道儀でガイドして行ない、



写 真	撮 影 年 月 日
①	1967年10月29日
②	1968 1 5
③	1967 7 28
④	1967 12 30



ルポム

える南天星座

カメラはアサヒペンタックス S2、フィルターなしで、Neopan SSS フィルムを使用して約2倍の増感現象をしている。撮影のデータは下の表のとおりである。

こうして、1966年3月から1968年1月まで撮影を行なった結果、7~8等級の星でも地平線上数度まで撮影できて、南天星座のインディアン、架車、旗魚、孔雀、ケンタウルス、祭壇、定規、時計、南十字、竜骨、レチクルのそれぞれの一部分を撮影することができた。

したがって鹿児島では、全天 88 星座の中 78 星座が観望可能である。

レ	ン	ズ	露出時間
55 mm,	F	2.8	5分
135,		2.8	10
55,		2.8	5
135,		2.8	10

